

◆平成 29 年度 第 2 回（通算第 63 回）蔵前ゼミ 印象記◆

日時：2017 年 5 月 26 日（金）

場所：すずかけ台 J221 講義室

社会の中で生きる～地域・家庭・仕事

関口 佐代子（1982 建築，84 MS） 関口佐代子一級建築士事務所 主宰

空き家となった田舎の我家^(注1)に思いを馳せながら、「それぞれの家族の思いに応える家づくり」を心がけているという関口さんの話と後半の学生参加の「将来の夢の家」に耳を傾けた。空き家になっている私の実家は、私の両親にとっては「夢を実現させた家」で、たまに東京から遊びに来る孫たちのために、村で最初となるウオッシュレットまで取り付けた。しばらくは、夏休みになると孫たちが押しかけ賑わったが、両親の老いと共に寂しくなり、数年前にとうとう空き家になった。関口さんが言うように人（家族）あつての「家」で、人無き家は、どんなに思い出が詰まっても単なる建物だと痛感する。

関口さんは、仕事・結婚・出産・育児・介護などの経験を通して、〔i〕変化する社会の中で生活し、仕事をしていること——例えば、今は雇用機会均等法があり、一昔前では考えられなかったような働き方改革が進められている、〔ii〕仕事や家庭に対する考え方や生活スタイルを含め、自分自身も変化し続けていること、そして〔iii〕現在の社会で必要とされている仕事や活動は何かなどについて強く意識するようになった。特に子育ての経験（台風襲来時に子供を学校に引き取りに行かざるを得なくなった時などの緊急時の対応）を通し、親同士で助け合うことの大切さを痛感させられ、私たちは「社会の中で生きている」という当たり前のことに改めて気づかされたそう。このように仕事や様々な経験を通して、関口さんの内面には足元を見る視点（意識）が芽生えた。社会の様々な問題を解決する糸口は身近にあることを実感するようになったのだ。そして、関口さんは積極的に地域活動に関わり活性化策を提案したり、「こどものための住まい設計ワークショップ」などを企画・実施したりするようになった。今回のパネルディスカッション「将来の夢の家」は、その大学院生版だ。講師の関口さんにとっても、小学生の頃の夢が大学院生になるとどう形

を変えているのか楽しみだったに違いない。

関口さんの略歴^(注2)

関口さんの頃（1983）の就活は、大判の卒業設計の図面をかついで設計事務所を回るのが普通だった。男女雇用機会均等法（1986）ができる前のことで、大手建設企業は男子優先だった。関口さんは元々設計事務所を希望していたので、そのことは余り気にならなかったが、M2の夏ごろに、内定していた設計事務所から「やはり男子を取りたいので、申し訳ないが…」と言われたときはショックだったそうだ。秋口に学科事務から呼び出され、「就職先が決まっていないのは、二人だけ」と言われ、心配になったので指導教員に相談し紹介されたのが一色建築設計事務所だった。20名余りのアトリエ系の設計事務所で、大きな建物の設計をグループで手掛けるというよりは、住宅レベルの小ものを一人ですべて担当し、仕上げる方式だった。住む人のための快適空間の創造を目指してチャレンジするのは魅力的だったし、木質空間へのこだわりも気に入り、雇ってもらうことにした（1984）。所長のやり方に賛同し、弟子入りすることにしたのだ。

いずれ独立したいと思ってはいたが、3年半で辞めることになるとは思ってもいなかった。同じ建築科の同級生と結婚し、子供に恵まれたのは幸せだったが、寝込まざるを得ないほど悪阻がひどく、職場に通えなくなってしまったのだ。無事長女を出産し落ち着いたところで（1989）、自宅で設計の仕事再開し、翌1989年に事務所登録をし、「関口佐代子一級建築士事務所」として現在につながる活動を始めた。当初は活動の舞台となる事務所を自宅に置かず、一級建築士事務所を主宰する3人が集まって共同事務所を東京の中野に借り、子供を公立保育園に預けて仕事場に通った。

表 1. 新築住宅を請け負った場合の仕事の仕方

敷地調査	市街化区域・用途地域・建蔽率・容積率・高さ制限(日影・斜線)・防火地域 地盤・災害危険区域 環境・隣近所の様子
建物計画	工法・規模・予算・プラン(間取り・仕様・設備・風水や家相) 耐震性能(1981年 新耐震基準) 断熱性能・気密性能・省エネ性能(2020年 新築住宅省エネ基準義務化) 防水性能 防火性能 防犯性能
予算管理	概算予算 建物本体以外の予算(引越し & 税金 etc.), 経費
スケジュール管理	全体的なスケジュールの作成と進捗の管理
設計業務	基本設計 実施設計 確認申請
施主へのプレゼンテーション	図面やその他もろもろの書類・模型などの準備
現場監理	施工業者対応 検査対応

1993年に長男を出産後は、自宅近くで事務所を借り、一人で仕事をするようになった。1998年に自宅を新築し、設計事務所を併設した。

一色建築設計事務所を辞めてからは自営業なので、子供が病気の時は脇で寝かせながら図面を描いたり、仕事を夜に回したりしながら対応し、大変な時期をのりきった。手掛けている仕事は住宅設計が中心だが、少し大きな集会場や店舗などはプロジェクト方式でネットワークを組んだり、大きいところと一緒に進めたりしているようだ。ここ8年程は親の介護も加わっていると聞いて、関口さんの底力に驚くとともに、演題『社会の中で生きる～地域・家庭・仕事』に込められた関口さんの思いをかみしめた。

関口さんの仕事と設計思想

関口さんのモットーは、『みんなちがってみんないい家』だそうだ。それぞれの家族にはそれぞれの暮らしがあり、住まいもそれぞれの家族によって異なる姿をしているのが自然だということのようだ。このように家族の生活に寄り添う住まいは、家族の成長とともに変わっていくのが望ましく、ひとつの家族にとって、かけがえのない空間を見つけ出す手助けをし、その変化に寄り添っていくことこそが関口さんが設計者として大事にしてい

る心掛けだ。こう聞くと、住宅設計は詩的な仕事のようなのだが、新築住宅案件の場合を例に、具体的な仕事内容を見ていくと甘い考えでは務まらないことがよく分かる(表1)。敷地調査から始まって、間取り、設備に風水や家相まで、設計に入る前にやるべきことがなんと多いことか！施主へのプレゼンには誠実かつ全力で臨み、最終段階では現場監督として施工業者とも対峙しなければならない。

関口さんの作品例

川崎市 Y 邸：竹林の崖に面した立地条件を最大限に生かすように心がけたそうだ。外壁には杉板を張って黒のオイルステインで仕上げ、リビングや浴室は人目のない崖側に配置し窓を広くすることにより、くつろぎの空間を演出した。露天風呂に近い感じを羨ましく思った人も多いだろう。

川崎市 S 邸：狭い敷地に広い居住空間を確保したいときに、スキップフロア方式が採用される。スキップフロアは、中2階や中3階を設ける方式で、基本的には壁で部屋を仕切らず、廊下も無いので、家全体の空間を居住のために用いることができる(家そのものが大きなワンルームと見なせる；図1)。間仕切りがない分、採光面では有利だが、空調には細心の注意をして設計しないと冷暖房費がかさむことになる。プライバシーに配慮が必要かもし

れないが、家族間の意思疎通は図りやすいだろう。耐震強度や省エネ性能の確保など設計には経験が必要なようだ。



図 1. 関口さんが設計した川崎市 S 氏邸。

講演の最後の方で、「実は、2 番目にお見せした住宅が我が家です」という紹介があったから、図 1 のスキップフロアが関口邸である可能性が高い。食堂の写真には、1993 年生まれの長男（当時 5 歳）が嬉しそうに料理を運んでいる姿が写っていた。将来、関口さんに設計してもらったスキップフロア構造の家で子育てをしたい（そうすれば、親思いで、お手伝い好きの子供に育つに違いない）と夢を膨らませた学生も多かったに違いない。

地域社会との関わり

社会状況は激しく変化している。関口さんが社会人になりたての頃には遠い先のことと思っていたこと（男女の雇用機会均等の流れや働き方改革など）が既に現実になっている。関口さん自身についても、仕事の経験を積むにつれ仕事に対する考え方が変わってきたし、結婚・出産・育児・介護などを通して生活スタイルや社会との関わり方も変わった。「自他ともに大きく変化する状況の中で、自分の活動や仕事をどうデザインしていくかということについて、自ら考える力が求められているのではないかと思います。この感覚を学生の皆さんと共有できれば嬉しい」とのことだった。“Think globally, act locally” と “Think locally, act globally” をミックスしたフィーリングかも知れ

ない。

仕事や様々な経験を通して、私たちの内面に、行動の規範となる“視点”（物事のとらえ方）が形成される。現代では、それが客観的でグローバルであることが要求されるが、それだけでは行動につながらない。関口さんの場合は、社会の様々な問題を解決する糸口は身近なところにあるということを経験的に学んだことから、足元を見る視線（目線、意識、感覚）が身に付いたようだ。基本的には、相手の立場に立って想像力を働かせて行動できるかどうかということに尽きるようだが、これが自然に出来るようになれば、今後の仕事において一番大切な顧客との信頼関係の構築につながるだろうし、災害時等の緊急事態下でもより良い行動ができるはずだとの考えのもと、現代社会が抱えるいろいろな問題の解決に向けて、建築家の視点から種々の取り組み（注 3）を行っているとのことだった。

関口さんの略歴で紹介された委員やボランティア活動の多さに驚きながら思ったのは、空間と時間には密接な関係があるらしく、空間の専門家である建築家には時間の使い方が上手な人が多いということだ。関口さんも例に漏れず、自分の建築設計事務所を運営する傍ら、驚くほど多くの活動（注 3）に参加し、建築家としての視点から、文化や地域の活性化に貢献している。例えば、建築工事紛争審査会の委員として、弁護士と協力しながら、神奈川県下で起きている工事の瑕疵（かじ）（欠陥）や代金の不払いなどを調停し、和解に持ち込む調停役を引き受けているが、もめごとの調停は時間のかかる仕事だろう。紛争審査会の Web 頁には、こんな例が報告されている：新築住宅の瑕疵に関し、注文主が工事請負人に 1,090 万円の損害賠償を求める調停を申請した。これに対し、工事請負人は「保証期間を過ぎた後の不具合であったにもかかわらず、誠意をもって対応し、既に無償で補修工事を行っているので、これ以上の損害賠償義務まで負うものではない」と主張した。最終的には、「慰謝料として 100 万円及び調停費用のうち 10 万円を支払う」旨の調停が成立した。

神奈川県建築士会の“子どもの生活環境部会”で

は、「こどものための住まい設計ワークショップ “つくってみよう!! 夢の家” —建築家になろう」を開催したり、小学校の家庭科授業の「住」に関する学習では、先生自身が何をしたいか困っていたところを、「住まい設計」実習を提案し、5年生には「自分の夢の部屋をつくろう」、6年生には「自分の将来の家」という課題に取り組んでもらい、最後に全員にキャッチフレーズを付けて発表してもらったりして好評を得ている。6月10日(土)には、その活動報告のための「子ども部会カフェ」が、アートをテーマにまちづくりを行っている黄金町の高架下スタジオで行われるとのことだったが、残念ながら私は Art Documentation 学会 2017 での講演と重なり参加できなかった。

-----パネルディスカッション-----

将来の夢の家

学生全員参加の新たなパネルディスカッションが試みられた。“何処に 誰と どんなふうに住りたいかをイメージしながら「将来の夢の家」を10分程度の短い時間で描いて提出する”という課題が前もって出されていた。167名の作品すべてに関口さんが目を通し、今日のためにコメントを入れて、1枚あたり約5秒で披露された。自由奔放で制約がほとんどない小学生の作品に比べると、結婚し家庭を持つことが視野に入り始めている大学院生の作品には、なるほどというものが多かったが、中には会場を沸かせるようなユニークなものもあった。関口さんの目には、自分中心の小学生の作品(それはそれでとても面白い)に比べ、今回の試みでは、家族・両親・地域の人たちとの関わりを念頭に置いて描いた作品が目立ったのは、頼もしかったようだ。そしてエンディングはこうだった:「皆さんが身に着けたいろいろな人々の暮らしを想像できる力(社会の中で生きるために大切な視点)をこれからの生活と仕事に生かして欲しいと思います」。

(注1) 祖父母の代には、茅葺き屋根の維持はあまりにも大変というので、村で最初に瓦屋根の家を建て、南の角には南天を植え、庭と用水路との境には、開

拓に行っていた北海道の咲来から持ち帰ったポプラを5本ほど植えていた。用水路の改修と村道の拡幅でポプラが姿を消したが、家の方は改修と補修で持ちこたえていた。私はこの家で生まれたので、私の幼少時の思い出の詰まった家でもあった。この家が補修の限界に近づいたので、1991年に両親によって新しく立て替えられたのが現在の家で、両親亡き後は私が形式上の家主になっている。

(注2) 関口 佐代子 略歴: 東京都生まれ | 都立 三田高校卒業 | 1982 東京工業大学 工学部 建築学科卒業 | 1984 東京工業大学 大学院建築学専攻 修士課程修了 | 1984 (株)一色建築設計事務所勤務 | 1987 出産のため退社 | 1989 関口佐代子一級建築士事務所主宰 ◆資格: 一級建築士 | 福祉住環境コーディネーター1級 | 神奈川県震災建築物応急危険度判定士 | 川崎市木造住宅耐震診断士 | 神奈川県木造住宅耐震実務講習修了 | 住宅省エネルギー設計技術講習修了 ◆所属団体・委員等: 神奈川県建築工事紛争審査会委員 | 川崎市建築審査会委員 | 神奈川県歴史的建造物保全活用推進員 (Heritage Manager) | 神奈川県建築士事務所協会 (環境ユニバーサルデザイン委員会; 高齢者・障害者の住環境整備のための調査報告) | 神奈川県建築士会 (子どもの生活環境部会, 子供に対する住教育; 日本建築学会子ども教育支援建築会議に所属) | 川崎市宮前区まちづくり協議会 (防災部会; 区民の防災意識を高める活動) | リビングプラス (宮前平地区活性化活動; 30代の店主や自営業の人たちと一緒に活動) ◆雑誌などに掲載された紹介記事: 「クロワッサン」No. 550, マガジンハウス, 2000.10.10 | ハウス食品広報誌「ペパーミル」, 2001年春号 | 「新しい住まいの設計」2002年4月号 | 「田園都市生活」エイ出版, vol.4 (2002.3.25) 特集: 快適田園都市生活術—生活面積が広い家に暮らす | 「田園都市生活」エイ出版, vol.11 (2003.12.25) ◆賞: 横浜市主催「既存住宅のエコリノベーション提案」コンペティション最優秀賞。

(注3) 地域社会との関わりとして、多くの事例が紹介された。その中から2,3拾ってみよう。◆設計: 関口さんは、[1] 横浜市主催のコンペ「既存住宅のエコリノベーション提案」に設計協力者として参加し、最優秀賞を獲得した。既存の中古住宅を減築 (Down sizing) することにより、耐震性・採光性・風通しなどを改善するとともに、断熱効果を

上げて省エネを実現したばかりでなく、子供たちが巣立った後の老夫婦の新しいライフスタイルも提案した。〔2〕横浜市緑区の自治会館を共同設計した（木造地上1階，2015年4月竣工）。国産の材木を活用し，外の塀には地元の子供たちの手になるタイルアート作品を貼り付けた。自治会館に愛着を持ってもらうことと防災拠点となる自治会館を皆に知ってもらうための試みだそう。〔3〕建築アイデアコンペ「団地の未来プロジェクト」に3人でチームを組んで応募し，佳作に入った。このコンペは「集まって住む未来」をコンセプトに，洋光台北団地のシンボリック的存在である集会場と周辺外構の再整備をテーマとしたもので，審査には隈研吾や佐藤可士和らがあたった。関口さんたちのグループは，“つなぐ 紡ぐ おいしい！交通拠点洋光台北『たまたま箱』”というタイトルで，団地の再生を提案した。〔4〕津波に襲われたことを想定して，神奈川県湯河原町の高台に仮設住宅を建設するアイデアコンペに参加（2016）。この仮設住宅計画コンペティション「未来に生きる仮設住宅を問う」は，神奈川県建築士事務所協会が

設立40周年を迎えたのを記念して行われた事業だ。いかに速く作り，法定期間の2年間どう使い，その後どう活用するかに知恵を絞ったそう。防災・減災に対する意識の啓発につながるだろう。◆委員やボランティア活動：〔I〕Heritage Managerとして，伝統的建物を調査・図面化し報告書を作成して，持ち主に登録有形文化財として保存するよう働きかけている。〔II〕川崎市の木造住宅耐震診断士として，耐震化の促進に努めている。〔III〕川崎市建築設計事務所協会環境ユニバーサルデザイン委員会委員として，高齢者の住宅改造助成，在宅重度障害者の住宅改良工事，介護保険による住宅改修工事の相談に乗りアドバイスしている。〔IV〕子ども部会では，小学生向けに「町の歴史を知る 建物を知る」や「夢の家を描く」教育プログラムを提供したり，夢の家を工作したり，蔵を捜し歩く探検イベントを企画したり，中高生のために建築講座を開いたり，釘を使わない木造工法をデモしたりすることにより，将来の住まい作りの担い手たちに，“街づくりは与えられるものではなく，自分たちで作っていくものだ”というメッセージを発している。

（東京工業大学 博物館 資史料館部門 特命教授 広瀬茂久）